



ບ້ານໂພນບ້ານທີ່ຕັ້ງໄປດ້ວຍຄວາມລ່ວຍເຫຼືອເຈິ່ງກັນແລະກັນ

「スワイカン」に満ちたポーン村



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

公益財団法人 鹿児島県国際交流協会

は じ め に



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

会長 弓 場 秋 信

(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、平成3年3月に中高生をマレーシアに派遣以来、今年26回目を迎えました。開発途上国で「国づくり、人づくりに貢献する」青年海外協力隊員の活動現場に鹿児島の青少年を派遣し、国際協力に対する理解を深めるとともに、ホームステイ等での異文化体験、学校等での現地学生との交流を通して、国際性豊かな青少年を育成することを目的に、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、青年海外協力隊鹿児島県OB会、公益財団法人鹿児島県国際交流協会で構成された実行委員会を実施しています。これまでに、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ラオス、カンボジアの6ヶ国に県下一円から今回の16名を含む331名の中高生を派遣しました。

今回の派遣国ラオス人民民主共和国は、ASEAN加盟10カ国中唯一の内陸国で、青年海外協力隊発足後最初に派遣されたアジア4か国のうちの1つです。以来、内戦時に一次派遣が中止されましたが、現在は59名が教育、行政、医療保健等の分野で活動しています。

本事業の共催市である鹿児島市、鹿屋市、霧島市、枕崎市、南九州市、南さつま市、いちき串木野市からの推薦13名と、企業の協賛を得ての実行委員会枠3名は、2回の事前研修でラオス語、ラオス事情、青年海外協力隊活動と国際協力、日本・鹿児島について学び、7月23日から30日までの日程で、ラオスの首都ビエンチャンに向けて出発しました。

首都ではJICAラオス事務所を訪問し、ラオスにおける青年海外協力隊事業や国際協力について説明を受け、団員は、ビエンチャン県ポン村での4泊のホームステイに臨みました。期間中、PCインストラクター、助産師として活動している2人の青年海外協力隊の活動現場の視察、ポンサワン小学校での学生との交流、そして村民との文化交流を行いました。

ここに団員の日々の体験・見たこと・感じたこと等が綴られた報告書「『スワイカンに満ちたポン村』(ບ້ານໂພນ ບ້ານທີ່ຕັ້ງມາໄດ້ດ້ວຍຄວາມຊ່ວຍເຫຼືອເຊິ່ງກັນແລະກັນ)」を作成いたしましたので多くの皆様にご覧頂ければ幸甚に存じます。

終わりに、本事業実施に当たりご支援ご協力を頂きました共催市、協賛企業、国際協力機構JICA九州国際センター、JICAラオス事務所、心温まるもてなしでホームステイを受け入れて頂いたビエンチャン県ポン村の皆様、そして活動中の青年海外協力隊員をはじめとする多くの関係者に、心より感謝申し上げますとともに、今後とも本事業へのご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

も く じ

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓場 秋信

ごあいさつ	1
鹿児島県PR・観光戦略部長 西 啓一郎	

第26回(平成29年度)鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要	2
参加団員等名簿	3
スケジュール	4
地図	5
体験事業ドキュメント(総集編)	6

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

団員が感じたこと	17
----------------	----

「ラオスで学んだこと・感じたこと」	實 亮太郎
「ホストファミリーとの生活」	原 田 愛 子
「スタディーツアー in ラオス」	山 本 珠 子
「ラオス ラオス ラオス」	軀 川 天 志
「研修から芽生えた夢」	古 里 孝 音
「ラオスに行って感じたこと」	上 迫 華 香
「心の温かさに触れて」	中 村 明日香
「本当の幸せとは」	二 宮 萌 音
「『カオニャオ』の香りに寄せて」	峯 下 将 孝
「ラオスでの研修で得たもの」	得 永 美 潤
「ラオスでの一週間を終えて」	藤 崎 蘭
「いつかは誰かの縁の下として」	鎌 田 実 里
「ラオスを訪ねて」	天 神 果 恋
「私が見たこと・感じたこと」	坂 口 未 結
「不発弾の残るラオス」	井ノ原 和
「コミュニケーションの大切さ」	向 吉 瞭

団長報告	33
------------	----

「鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書」

古田 宣稔(青年海外協力隊鹿児島県OB会 会長)

同行者感想	34
-------------	----

「ラオスが教えてくれたこと」	吉 原 久美代
「忘れられない経験」	門 野 真 琴
「団員の大きな成長」	酒 井 恵
「コプチャイ(ありがとう) ラオス！」	藤 崎 優 祐
「心の豊かさ」	末 吉 弘 孝

新聞記事(南日本新聞)	39
-------------------	----

参考資料

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要	44
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績	45

ごあいさつ



鹿児島県PR・観光戦略部長

西 啓一郎

「第26回(平成29年度)鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

これも、事業実施に御尽力された弓場秋信実行委員会会長をはじめ、関係者の御支援・御苦労の賜であり、心より敬意を表します。

また、皆様方にはかねてから本県の国際交流・国際協力に関する施策の推進に格別の御協力をいただいておりますことに対しまして、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

今回の体験事業では、7月23日から30日まで7泊8日間の日程で、ラオスを訪問し、現地でPCインストラクター、助産師として指導活動を行っている青年海外協力隊員2人の活動現場を視察したほか、現地家庭でのホームステイ、現地の小学生との交流等を体験したと伺っております。

今回の訪問国であるラオスは、1965年に日本が初めて青年海外協力隊を派遣した国であり、1991年以降、日本は、インフラ、農業、教育、保健などの分野を重点分野として支援を行っています。2015年からは、ラオスの公立校で日本語が第2外国語として正式にカリキュラムに取り入れられるなど、日本とラオスの関係はますます近くなっていると思います。

団員の皆さんは、8月2日に県庁を訪問し、県PR・観光戦略部次長及び県教育次長に帰国報告をされました。ラオスの人々との心温まる交流エピソードや、生活習慣・文化の違いによる戸惑いや驚きの体験談、青年海外協力隊員の活動を現地で視察した感想など、多岐にわたりたいへん興味深いお話をいただいたと聞いております。

今回の訪問で、団員の皆さんが自分の目で見て、感じ、考えてきたことは、実際にラオスへ足を運ばなければ体験することのできない、たいへん貴重なものだと思います。それらを心に深く刻み、実行委員会の方や御家族、渡航先でお世話になった方など事業実施を支えてくださった全ての方々への感謝の気持ちを忘れず、今後の人生の糧とするとともに、これからも何らかの形で多くの方々に積極的に伝えてほしいと希望しております。

また、今後も様々な機会を捉えて、国際交流・協力や国際社会等についての学習を深められ、皆さんの今後の進路決定等に活かしていかれることを期待しております。

最後に、「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の今後ますますの御発展と、関係の方々及び団員とその御家族の皆様方の御活躍・御多幸を祈念いたします。

第26回（平成29年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

- 1 主 催** 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
 ※ 構成団体 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
 青年海外協力隊鹿児島県OB会
 公益財団法人鹿児島県国際交流協会
- 2 共 催** 鹿児島市，鹿屋市国際交流協会，枕崎市教育委員会，
 霧島市国際交流協会，いちき串木野市国際交流協会
 南さつま市友好交流推進協議会，南九州市教育委員会
- 3 後 援** 鹿児島県
 鹿児島県教育委員会
 独立行政法人国際協力機構九州国際センター
- 4 協 力** 駐日ラオス大使館
- 5 協 賛**

鹿児島空港ビルディング(株)	鹿児島トヨタ自動車(株)
鹿児島ヨコハマタイヤ(株)	(株)鹿児島銀行
(株)下堂園	(株)Misumi
(株)山形屋	(株)レイメイ藤井
キンコー醤油(株)	小正醸造(株)
薩摩酒造(株)	弓場貿易(株)
南国殖産(株)	
- 6 事業の流れ**

4月～5月	募集・団員決定
6月17日（日）	第1回事前研修
7月1日（土）～2日（日）	第2回事前研修
7月23日（日）	出発
7月30日（日）	帰国
8月2日（水）～10月11日（木）	表敬訪問
8月20日（日）	報告会
9～10月	報告書作成
- 7 派 遣 国** ラオス人民民主共和国
- 8 派 遣 期 間** 平成29年7月23日（日）～7月30日（日）
- 9 派 遣 人 員** (1) 参加者 16名
 (2) 引率者 6名

参加団員等名簿

■ 団 員

	名 前	性別	学 校	学年	市 町 村
1	さね 実 亮太郎	男	鹿児島市立星峯中学校	2	鹿 児 島 市
2	はら だ あい こ 原 田 愛 子	女	鹿児島県立甲南高等学校	1	鹿 児 島 市
3	やま もと み こ 山 本 珠 子	女	鹿児島高等学校	1	鹿 児 島 市
4	く がわ てん 軀 川 天	女	鹿児島県立鹿屋高等学校	1	鹿 屋 市
5	ふる さと こう し 古 里 孝 志	男	鹿児島県立鹿屋農業高等学校	3	鹿 屋 市
6	かみ さこ か のん 上 迫 華 音	女	鹿児島県立川辺高等学校	3	枕 崎 市
7	なか むら あす か 中 村 明日香	女	鹿児島県立川辺高等学校	3	枕 崎 市
8	にの みや も ね 二 宮 萌 音	女	鹿児島県立加治木高等学校	2	霧 島 市
9	みね した まさ たか 峯 下 将 孝	男	鹿児島県立国分高等学校	2	霧 島 市
10	とく なが み うる 得 永 美 潤	女	神村学園中等部	3	いちき串木野市
11	ふじ さき らん 藤 崎 蘭	女	神村学園高等部	2	いちき串木野市
12	かま だ み さと 鎌 田 実 里	女	鹿児島県立川辺高等学校	2	南 さ つ ま 市
13	てん じん か れん 天 神 果 恋	女	鹿児島県立川辺高等学校	3	南 九 州 市
14	さか ぐち み ゆ 坂 口 未 結	女	神村学園中等部	3	薩 摩 川 内 市
15	い の はら なこみ 井ノ原 和	女	鹿児島県立川内高等学校	2	伊 佐 市
16	むこう よし りょう 向 吉 瞭	男	鹿児島県立楠隼中学校	3	東 串 良 町

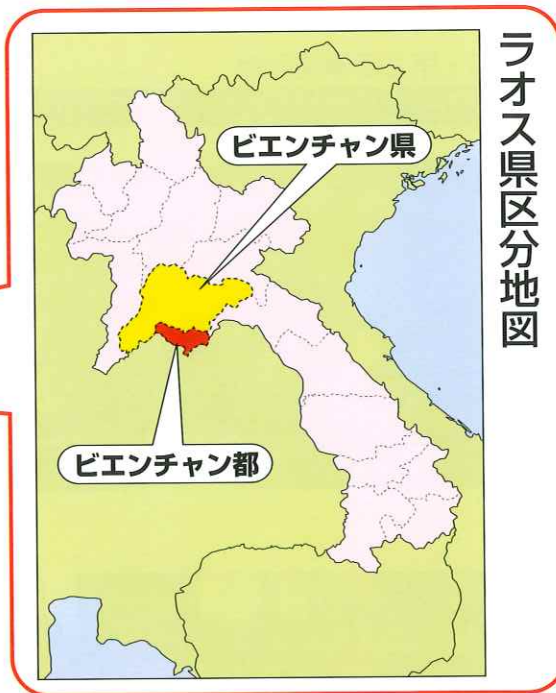
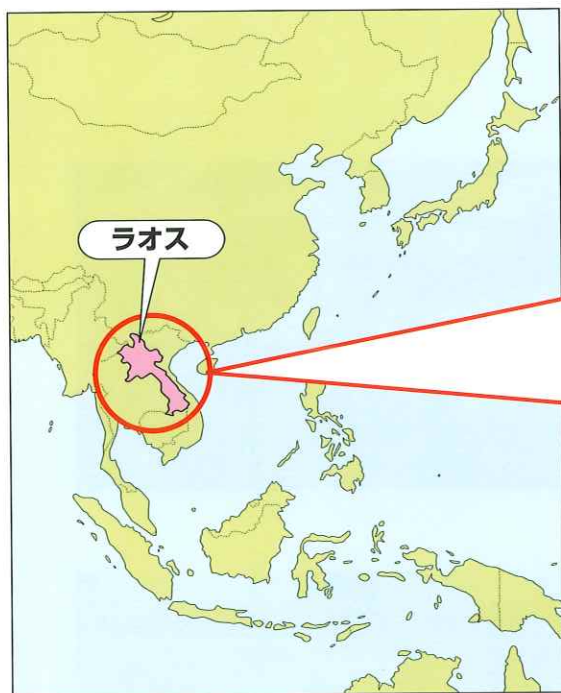
■ 同行者

		名 前	性別	備 考
1	団 長	ふる た のり とし 古 田 宣 稔	男	青年海外協力隊鹿児島県OB会 会長
2	健康管理	よし はら く み よ 吉 原 久美代	女	青年海外協力隊ルワンダOG(公衆衛生)
3	調 整	かど の ま こと 門 野 真 琴	女	青年海外協力隊ベトナムOG(病虫害)
4	調 整	さか い めぐみ 酒 井 恵	女	公益財団法人 鹿児島県国際交流協会 交流推進員
5	マスコミ	ふじ さき ゆう すけ 藤 崎 優 祐	男	南日本新聞編集局報道部 記者
6	マスコミ	すえ よし ひろ たか 末 吉 弘 孝	男	鹿児島読賣テレビ株式会社報道局報道部 記者

スケジュール

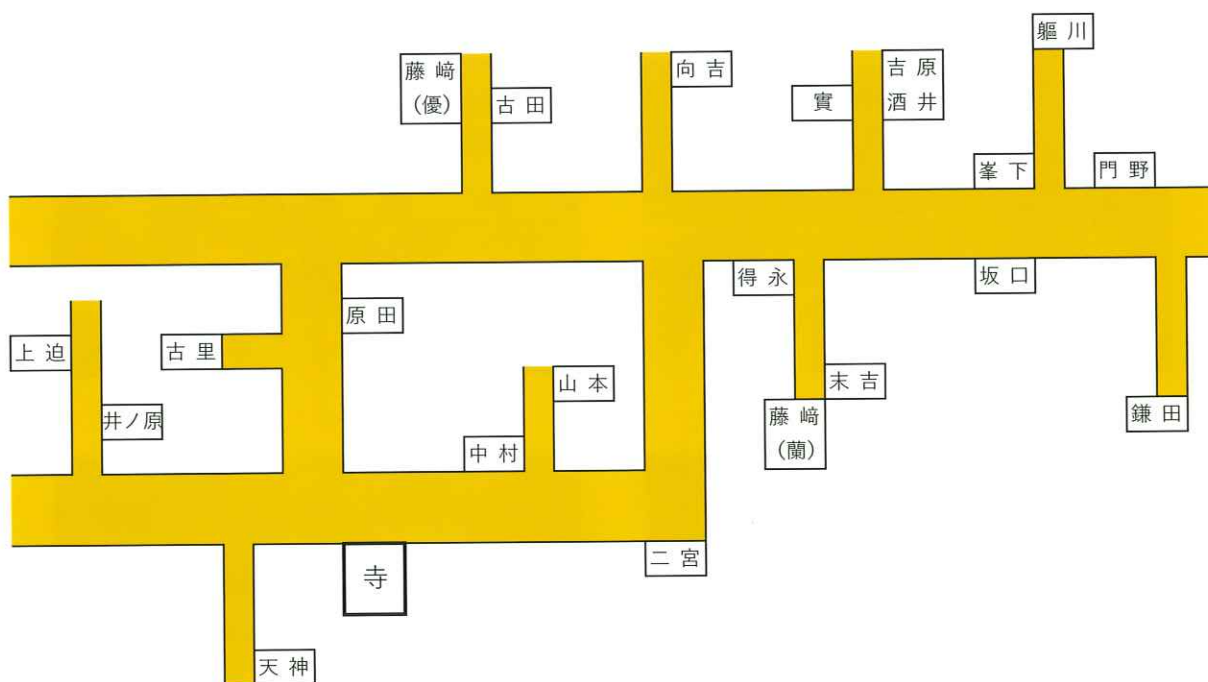
月 日	曜	地 名	時 刻	交通機関	内 容	宿 泊
7月23日	日	鹿児島中央駅 鹿児島中央駅発 博多駅 福岡空港発 バンコク (スワンナプーム国際空港) ビエンチャン (ワットティ国際空港)	6:00 7:07発 8:46着 11:35発 14:55着 19:35発 20:45着	さくら542 タクシー TG649 TG574 バス	集合・結団式 福岡空港へ移動 チェックイン ホテルへ移動	ホテル
7月24日	月	ビエンチャン ポーン村	10:00～11:30 15:00	バス バス	JICA ラオス事務所 表敬 入村式	ホームステイ
7月25日	火	ポーン村 ビエンチャン都 ポーン村	7:30 9:30～11:00 	バス	出発 青年海外協力隊活動視察 【PCインストラクター 伊藤 珠希 隊員】 場所：UXO LAO 午後：ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月26日	水	 ポーン村	8:00 9:00～11:00 14:00～16:00	バス	出発 青年海外協力隊活動視察 【助産師 宮林 春佳 隊員】 場所：トゥラコム郡病院 学校交流 場所：ポンサワン小学校	ホームステイ
7月27日	木	ポーン村	9:00～13:00 13:00～		ポーン村バーシー・お別れ会 ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月28日	金	ポーン村 ビエンチャン	9:30 13:00～16:00 18:00～19:00	バス	午前：村とのお別れ ビエンチャン視察（周辺観光） ラオス伝統舞踊ショー見学 場所：クア・ラーオ レストラン	ホテル
7月29日	土	ビエンチャン ビエンチャン(ワットティ国際空港) バンコク(スワンナプーム国際空港)	9:00～ 21:30発 22:35着	バス TG575	ビエンチャン視察（周辺観光） タートルアン、パトゥーサイ ワット・シーサケート 空港へ移動	機内泊
7月30日	日	バンコク(スワンナプーム国際空港) 福岡空港 鹿児島着	0:50発 8:00着 13:00着	TG648 バス	 解団式(県民交流センター)	

地図



ラオス県区分地図

ポーン村ホームステイ先地図



体験事業ドキュメント（総集編）

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

第1回・第2回事前研修

6月17日(土),7月1日(土)～7月2日(日)



7月23日(日)
結団式・出発



機内にて
一般の方が英語で「日本人?」と聞いてきて、その後 楽しそうに会話してきたので「親日感」を実感した。

原田 愛子



ラオス到着



ラオスは赤土の道が多く、バイクに乗っている人がノーヘルだったり、3人以上で乗っていたりしてびっくりした。独特な「かおり」もした。

向吉 暲

7月24日(月)

JICAラオス事務所 訪問



支援は押しつけるだけではなく、現地の人と同じ目線に立つことが必要だと思った。支援に慣れている人が多いと聞き、「なぜ」「何が必要か」など考えるべきだと思った。

天神 果恋

7月24日(月)

入村式・ホストファミリーとの対面(ポン村)



ステイ先の近くの田んぼを通った時に、カオニャオ(ラオスのもち米)の香りがした。その香りはラオスのゆったりとして、温かい雰囲気を想起させるものでした。
峯下 将孝

7月25日(火)

午前：青年海外協力隊活動現場視察 (伊藤 珠希 隊員・PCインストラクター)
UXO LAO



現地の人との気持ちぐすれ違うことがあっても折れずに、相手のために思い尽力して今につながっている伊藤さんはとてもカッコイイと思いました。何事にも諦めない心が大切!
坂口 未結



「どうして外の世界へ出ようとするのか?」という質問に対して、「当たり前」の教育が当たり前ではないこと」「自分が受けて来たものは世界のお陰だと強く思い、世界へ還元したい」という伊藤隊員の言葉に学ぶものがあつた。(伊藤隊員の話を受けて)子ども達が専門的なものを学ぶ時に役立てるように、道徳面などで子ども達を小さい時から支えたら良いのかなと思った。

山本 珠子

昼食・ダム視察



7月26日(水)

午前:青年海外協力隊活動現場視察 (宮林 春佳 隊員・助産師)
トゥラコム郡病院



日本より設備も看護師の質も低いところがあるのに、宮林隊員の「ラオスから学ぶことがある」という言葉に驚いた。日本では設備が整っている分、医療機器に頼り過ぎていく面もあるそうだが、ラオスでは看護師や医師の手で正確に判断ができる話も伺った。

軀川 天

「日本の考えを押し付けないこと」や「違った角度から見ることで見えてくるものがある」という宮林隊員の言葉が印象的だった。無事に赤ちゃんが生まれて、家族が幸せそうにしている姿を見た時にやりがいを感じる話を受けて、自分の生活を楽しむことや家族愛について考えるきっかけとなった。

二宮 萌音



7月26日(水)

午後:ポンサワン小学校交流会



私はこの体験事業に参加する際、保育に興味があったのでラオスの子ども達がどんな生活をしているのか、あるいは日本の子ども達との違いはあるかなど見てみようと思いました。体や頭や手を使って遊ぶことが多いラオスの様子から日本が見習うべきところがあるのではないかと思います。

上迫 華音



子ども達はしっかりと整列し、椅子など自分で片付けていたため、小学校低学年なのにすごいと思った。ダンスは手の動きがきれいで、一緒に踊ろうと誘いに来てくれた男の子たちがとても可愛かった。

中村 明日香

ホームステイの様子



ラオス語の壁が一番高かった。その壁を乗り越れてはいないが、ラオスは助け合いの精神が根強かったから、壁を登ることは出来たと思う。別れはとても寂しかったけれど、いつかはボーン村へもう1度行きたい。

實 亮太郎

7月27日(木)

昼:ホストファミリーとのお別れ会



パーシーという儀式が印象的でした。お寺の中で円になって座り、お酒をかけられました。手首に糸を巻いてもらったとき、温かさを感じました。今回の経験で、私は以前の自分とはものの見方・考え方、視の広さなど大きく変わったと感じました。それらを普段の生活にしっかり生かしたいです。

得永 美潤

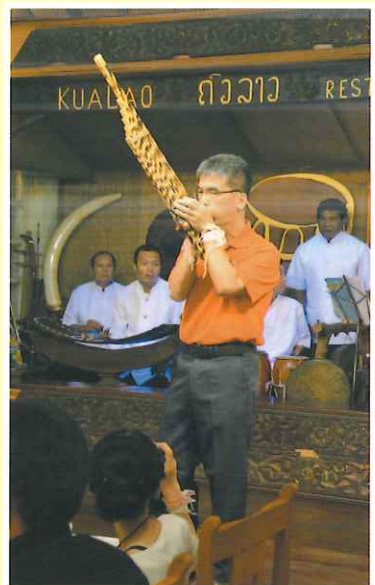
7月28日(金)

午前:ホストファミリーとのお別れ



最貧国と言われるラオスだけれど、人との交流に関してはそういったものを全く感じる事がなかった。助け合いの精神が根付いていた。入村式や(お別れ会での)パーシーなどを通して、「人との出会い」が大切なものに含まれていると思った。また、幸せはものではなく、自分自身が明るくいられることだと感じた。
井ノ原 和

午後:マーケット視察 夜:クア・ラーオレストラン



7月29日(土)

ビエンチャン周辺観光



7月30日(日)

帰国・解団式



研修で学んだことは、ものの見方や捉え方は幾通りもあるということだ。私自身もそのような見方や考え方を実践出来るようになった。この研修に参加できて本当に良かった。

古里 孝志

8月3日(水)～10日(水)

表敬訪問



様々な人のサポートがあつて、この研修を無事に終えることができました。この一週間で学んだことをこれから生かしていけるように、また、この恩を将来どんな形でも返せるようにしていきたいと思います。

藤崎 蘭

8月20日(日)

報告会



私の今できることは洋服を寄付することなど小さな活動のみ。けれど途上国の人々を支えたり、青年海外協力隊員を支えられるようなことをしたりと大学生になっても社会人になっても実行し続けたい。

鎌田 実里

団員が感じたこと

「ラオスで学んだこと ・感じたこと」

星峯中学校 2年 實 亮太郎

僕は、「発展途上国の現状をこの目で確かめたい」と思い、この事業に参加した。ラオスはGDPが鹿児島県の5分の1程度である。また、ベトナム戦争時にラオスは、「北爆」と呼ばれる空襲で、当時の人口の1人あたり1トンもの爆弾が投下された悲惨な歴史を持っている。今回、ラオスで過ごした7日間のうち、特に印象に残っていることが三つある。

一つ目は、UXO LAOで不発弾除去の活動をしている伊藤さんの話だ。ベトナム戦争の空爆によって、ラオス国内には今もなお、大量の不発弾が残っており、完全に撤去するには100年はかかるとのことだった。ベトナム戦争が終結して半世紀近く経つが、戦争の爪痕は今も人々の生活に大きな影響を及ぼしており、改めて戦争は二度と起こしてはいけないと思った。

二つ目は、青年海外協力隊で助産師として働いている宮林さんの活動を視察したことだ。宮林さんが活動しているトゥラコム郡病院は、平屋の小さな建物で、そこに病院と歯科医院、薬局が併設されていた。病院内部は、ベッドと診察台、そして僅かな医療機器しかなく、医療環境は日本と比べ非常に遅れている印象を受けた。しかし、宮林さんが話された「日本は、大変な時にすぐに機械に頼るが、ラオスでは、機械に頼ることなく自らの手で正確な判断を下すことができる。」という言葉に、発展途上国で働く人の仕事に対する誇りと責任の重さを痛感した。

三つ目は、生活習慣や文化の違いだ。特に、食事、トイレ、風呂、この三つが日本と大きく違っていた。ホームステイ先のポーン村では、食事の時に、箸を使わず、手で食べていた。食べ物も日本では食べたことのない蛙や鶏の足が食卓に並んだ。次にトイレ。日本のトイレは、水洗でトイレットペーパーを使うが、ラオスの場合、トイレの隣にある桶の水を使い、用を足す。風呂は水桶しかなく、水浴びをする程度だった。

文化の違いは、やはり言葉の壁を感じたことだ。ホームステイ初日は、ホームステイ家族とうまくコミュニケーションをとることができなかった。そこで、2日目からは、自らコミュニケーションをとろうと、ジェスチャーを交えて話すことで、自分の伝えたいことをホームステイ先の家族に伝えることができた。外国で自分の考えが伝わらない不便さを感じたが、言葉の壁というものは、自らコミュニケーションをとっていくうちに自然となくなっていくものだと実感した。

今回の研修に参加して、改めて日本はすごく恵まれていると感じた。また一方で、ポーン村の人々との交流から物資面では得ることのできない心の豊かさを学ぶことができ、観光では味わうことができない貴重な体験ができた。

僕の将来の夢は、医者になって海外で働くことだ。この経験を糧に、これからも目標に向かって頑張っていきたい。



メコン川にて



学校交流の様子

「ホストファミリーとの生活」

甲南高等学校 1年 原田 愛子

今回の研修は、私にとって初めての連続だった。初海外、初発展途上国、初ホームステイ。五感で感じるものすべてが、新鮮で興味深いものばかり。本当に良い経験となったと思う。

私の目的は、主に2つ。1つは「青年海外協力隊の方々を知ること」である。これに関しては、とても一言で書き表すことができない程多くのことを知り、学んだ。

2つ目は「ラオスを知ること」である。特に、ホームステイの時は、日本との習慣や生活形態の違いを肌で感じた。

知ったこと、学んだことは数多くあるが、全体を通して感じたことがある。それは「固定観念を捨てること」と「現状を知ることの大切さ」そして、「人と関わることの大切さ」である。

蛇口をひねれば飲める水が出る、風呂は温かいお湯につかれる、発展途上国は先進国より劣っている、などという固定観念や当たり前だという気持ちはやはり捨てるべきだ。捨て、改めるべきなのだとは強く感じた。そのような固定観念によって、私たちは時に大きな勘違いをし、間違いを犯すからだ。難しいことではあるが、実際身をもって体験すると、いかに自分が無知であったかがよくわかった。

次の「現状を知ることの大切さ」。これは、青年海外協力隊の方々のお話を聞いて痛感した。何をするにも現在の状況を知ることが第一に優先すべきことであり、抜かしてはならない重要な作業である。

最後の「人と関わることの大切さ」。これは、ホームステイ中に強く感じたことだ。ホストファミリー

と積極的に関わっていったことで「見ていただけ」「されているだけ」という受け身の自分ではわからなかったことや新たな発見をたくさんすることができた。それは、とても些細なことでも、気にも留めないようなことであつたり、誰もが驚くようなことであつたりと様々であつたが、そうしたことを見つけることができたのも「人との関わり」があつて、“communication”をとってこそなのだと思う。特にラオスでは、近隣住民の交流が活発で、村の結束力があり、子ども達の人見知りすることなく誰とでも接していた。それは、人と関わっていくなかで、“疑いの目”を捨ててくることのできない日本人の私たちには、衝撃であつたと同時に、目指すべき姿だとも感じた。今回感じたことを日本に還元し、自身の生活にも活かしたい。



ホストファミリー



ホストファミリー

「スタディーツアーinラオス」

鹿児島高等学校 1年 山本 珠子

ラオスで過ごした時間は、どんな言葉でも言い表せられないくらい素敵なものでした。

日本に帰ってきてから、多くの人にラオスの話をしました。その度にラオスでの出来事を思い出し、懐かしく思いました。それと同時に、少しどきどきしました。私は現地での約1週間の生活を過去のこととしてとらえています。それがあたりまえの生活として今を生きている人がいます。そして、私にとっては日本での生活があたりまえです。あたりまえってなんだろう、難しいなと思いました。きっとあたりまえは世界中に数えきれないくらいあって、生きているうちにはそのうちの一握りにしか出会えません。一体私はいくつのあたりまえを知ることができるのだろーと思いました。また、これも将来の目標の一つとしていきたいです。

「途上国には支援が必要だ」という言葉をよく耳にします。私もするべきだと思っていましたが、少し違うような気がしてきました。お金にとられずに幸せに暮らしているラオスの方と過ごすうちに、それぞれの幸せの形があることに気づかされました。そう思うと、なんだか手を加えることはどうなんだろうと考えさせられました。それでも改善すべきところはあり、やっぱり国際協力が必要です。そして、それ以上に子どもたちの笑顔と触れ合うと、青年海外協力隊といったような仕事に就けなかったら、私自身すごく悔しいなとも思いました。

募金や物資の支援なども国際協力の一つです。そして、私はもう一つの国際協力の考え方があると思います。それはいろいろな国で家族や友だちをつくることです。世界では、毎日様々なことが起こっており、明日生きていけるか、心配しながら眠りにつく人もいます。そのような現状に直面したときに、その国に住んでいる家族や友だちの顔が思い浮かんだら、とても他人事とは思えません。ましてや戦争なんて起こらないはず。そうやって世界はちょっとずつ変わっていくんじゃないかなと思います。

この事業や私たちを支えてくださった全ての方に感謝しています。初めての外国でこんなにも安全に過ごせたのは、同行者の方がいつも気を配っ

て下さったおかげです。また、ともに派遣されたメンバーはみんな芯が強く、自分の考えをしっかりと持っていました。この仲間たちに出会うことができて本当に良かったです。

今回のスタディーツアー in ラオスは、これで終わりです。しかし、これから大人になっていく私たちの人生のスタディーツアーはまだまだ続きます。もしかしたら、あっという間に過ぎてしまうかもしれません。だからこそ、目の前にあるもの全てを大切にしていきたいです。

ラオスのにおいや音、雰囲気など、見たり感じたりしたこと一つ一つ全てを忘れずに、ずっと心の中に残しておきたいです。



村の子どもの笑顔



お別れの日 本人：中央

「ラオス ラオス ラオス」

鹿屋高等学校 1年 軀川 天

僕はこの研修でラオスに行き、感じたことが二つある。

一つ目は、日本やアメリカなどの先進国と呼ばれる国とラオスなどの発展途上国の生活の質の違いだ。

先進国の家には、ほぼ100パーセントと言っているほど、温かいお湯が出るシャワーや水洗トイレなどがあるが、ラオスの家には、冷たい水が出るシャワーさえなく、自分で流すタイプだった。道路も先進国のようにどこでも舗装されているわけではなく、首都のピエンチャン特別市を出れば、舗装されていないガタガタな道になった。その一方で、村の人たちはスマートフォンを持っていたり、大きなスピーカーが家に置いてあったりして、とても驚いた。訪問前には、村の人たちがスマートフォンを持っているなど思ってもなく、テレビもない家もありそうなどと思っていたが、行ってみると予想が外れたので、現地に行かなければわからないこともたくさんあると思った。

二つ目は、ラオスの人たちの優しさと助け合いの精神だ。

僕が村で友達と散歩をしていると、いきなりスコールが降ってきた。その時に、全然知らない村人が僕に傘を貸してくれた。他にも、ご飯の時間に散歩をしていると、すぐに村の人が「ご飯食べて行きなよ。」や「お腹空いていない？」など声をかけてくれた。JICAの事務所で職員の人が、ラオスにはホームレスや捨て子が少ないと言っていた理由が分かった。

三つ目は、英語の大切さだ。

事前研修の時に、藤本さんに英語を話せる人はあまりいないと言われていたが、村には2、3人英語を話せる人がいた。英語を話せる人は、小学生が多く、「なぜ英語が話せるのか」と聞くと、「夏休みにイングリッシュスクールに行っている」と

答えた。発音も上手く、すらすらと単語が口から出ていたので、日本の高校生よりも英語が上手だと思った。僕は前から英語が好きでたくさん勉強をしていたため、たくさん話せた。しかし、まだ知らない単語があったり、すぐに思いつかない単語があったりするのでもっと勉強をして将来につながりたいと思う。

このように、僕はこの研修で多くのことを学べたと思う。これらの経験は、必ず自分の将来の仕事や進路選択につながると思う。それと同時に、英語をはじめ、国語やその他の教科の勉強ももっとがんばろうと思った。そして、この7泊8日の研修で得た経験や学んだこと、感じたことを家族や友達に教えたり、学校で発表したりしたいと思った。そうすることで、ラオスのこと、その他の発展途上国のことも知って欲しいと思う。人生の中でベスト3に入るとてもいい1週間になった。



ホストファミリーの兄弟と一緒に 本人：左



学校交流の様子

「研修から芽生えた夢」

鹿屋農業高等学校 3年 古里 孝志

私には、この研修で特に印象に残っている出来事が2つあります。1つ目は、青年海外協力隊の活動視察です。この視察は2回あり、1回目はUXO LAO(不発弾除去組織)に配属された伊藤珠希隊員のところを視察しました。UXO LAOとは、ベトナム戦争の際に落とされた200万トン以上もの爆弾の不発弾の処理や、その危険性を伝える活動を行なっている団体です。伊藤隊員はそこで、PCインストラクターとして不発弾に関する情報の整理を主に行なっています。そのため普段、伊藤隊員が不発弾の現場に出ることはないのですが、1度だけ実際に現場で、不発弾除去の一連の作業を見たことがあるそうです。一連の作業とは、まず金属探知機で不発弾を探し、発見後その一帯を危険区域に設定し安全を確保する。その後、いくつかの危険区域に優先度を決めてその順に爆破していく。この作業を見たとき伊藤隊員は爆弾の威力に驚愕し、人の命に関わる仕事をしていることを実感したそうです。私はこの話を聞き、このような爆弾が200万トン以上も落とされ、今も不発弾として残っていることに恐怖を覚えました。しかし、それとは対照的に海外で人の命に関わる仕事をしている伊藤隊員をかつこ良く思いました。そして、2回目はトゥラコム郡病院に助産師として配属された宮林春佳隊員のところを視察しました。宮林隊員は助産師としての活動はもちろんのこと、コミュニケーションの一環として院内フットボール大会、ラオスの方の結婚式へ参加などを行なっているそうです。私は、海外の方とコミュニケーションをとったり、海外の文化に触れられる環境にいる宮林隊員を非常に羨ましく思いました。また、この視察を行ってから、研修前にはなかった海外で働きたいという思いが生まれました。

もう1つの印象に残っていることは、ホームステイ先でのことです。私はホームステイ初日に村の子供たちに折り紙を教えました。子供たちは会って間もない、言葉もほとんど通じない私の話をよく聞いて、楽しそうに折り紙を折っていました。また、別の日には私たちが盆踊りや日本の歌を村の方々に披露する機会がありました。その際、音

源のCDが流れないというハプニングがありました。しかし、村の方々が最後まで優しく見守ってくださったおかげで、なんとか披露を終えることができました。

この2つの出来事から、私は村の方々のあたたかさを感じ、村の方々、ひいては村の方々のような発展途上国の方々のためになにかできることはないだろうか考えるようになりました。そして現在は、活動視察を通して生まれた海外で働きたいという思いと、ホームステイを通して生まれた発展途上国の方々のためになにかしたいという思い、この2つの思いから、青年海外協力隊になりたいと考えています。特に、私が高校で農業土木を学んでおり、卒業後も大学で農業土木について学ぼうと考えていることから、農業土木に関する隊員を目指そうと考えています。今回の研修で芽生えたこの夢を叶えるべく、これからより一層の努力をしていきます。



ホストファミリーと一緒に 本人：中央



折り紙を折る子ども達

団員が感じたこと

「ラオスに行って感じたこと」

川辺高等学校 3年 上迫 華音

最初ラオスに行こうかどうか迷っていました。今では、行って良かった、行かないと絶対に後悔したと思っています。一生の自分の糧と思い出と、たくさんの日本とラオスの友達と、第2の家族ができました。

ラオスに行くことが決まった時、せっかく行くのだから自分が興味のある保育や子どもたちの生活など、日本とラオスの違いについて見るのができたらいいなと思ってラオスへ行きました。

この事業では、青年海外協力隊として現地へ派遣されている方の視察、首都ヴィエンチャンでの観光、小学校訪問、ポーン村でのホームステイなどたくさんの経験ができました。どの体験を通して様々なことを考えさせられ、学べたと思います。しかし、この中でも1番多くのことを感じたのは、村でのホームステイです。

ラオスは発展途上国の一つです。世界最貧国と言われたこともあり、日本の50年前と同じような生活だということも聞きました。ラオスへ行くまで私は、ラオスはとても不便な所だとばかり思っていました。しかし実際は、冷蔵庫も洗濯機もあり、スマホを持っている人もいて驚きました。また、ラオスは、とても心の温かい人ばかりの国だとも聞いていました。聞いていたとおり、近隣の人たちとの距離や繋がりが強く、心の温かい人ばかりで、友だちが遊びに来たり、泊まりに来たり、隣の家でなべ料理を食べたり、果物をもらったりしていました。温かい人で溢れた国で育っているラオスの子どもたちは、とても目がキラキラしていました。日本の子どもたちが公園に集まってゲームをしているのに対して、ラオスの子どもたちはよく体を動かして、走りまわって遊んでいるのが印象的でした。それらは、日本がラオスから学ぶべきところだと思いました。日本は先進国で、ラオスは発展途上国。先進国が発展途上国から学ぶことはあ

まりないように見えて、意外と学べることはたくさんあると思いました。

私は、ラオスへ行ったことで、様々な事を考えたり感じたりすることができました。ラオス語がわからず、珍しく心が折れそうになりましたが、ホストファミリーがどうにか伝わるようにジェスチャーで伝えてくれました。おそらく、私もホストファミリーもお互いに、伝えたいことを半分も伝えられなかったと思います。それでも、いつも優しい心で接してくれました。たった4日間でしたが、私の大好きで、大切な家族になりました。

最後に、この事業を勧めて下さった担任の先生、背中を押してくれた友だち、見ず知らずの日本人を快く泊めてくれたホストファミリー、一緒にラオスに行って下さった同行者の方々、そして、ラオスへ行くことへ反対せず送り出してくれた両親に、とても感謝しています。



学校交流にて 本人：左



ポーン村の田園風景

「心の温かさに触れて」

川辺高等学校 3年 中村 明日香

今回のラオスでのスタディツアーに参加したのは、日本と海外での環境の違いというものに触れ、発展途上国とはどのような場所なのかを自分の目で見てみたいと思い、参加しました。私にとって、この事業に参加することは、将来への第一歩であり、視野を広げる良い機会でした。

ラオスで過ごした7泊8日のなかで、特に印象深かったのは、ポーン村で過ごした4日間です。

私は、元気なホストマザーに腕を組まれ、家へと向かい、2人の子どもたちと対面しました。事前に、ラオス語での自己紹介など簡単な会話は学んでいたものの、私のコミュニケーション能力の低さと焦りで、何をしたら良いのかわからなくなり、これからの生活がとても不安でした。そんな私を見て、ホストシスターが、私を他の団員のホームステイ先に連れていってくれ、不安を取り除こうとしてくれました。翌日には、初日に渡した折り紙や扇子など日本のものを通して、自然とコミュニケーションがとれるようになりました。そして、村で過ごすにつれて、近所の子どもたちと仲良く遊んだり、夜には、村中を散歩したりとゆったりとした時間で、色々な経験をすることができました。

この4日間で、常にかけていたことは、村の人々は、優しく、とても心温かかったということです。事前学習の際に、ラオスは助け合い（スワイカン）の国だと聞きました。実際に、物の貸し借りやおもてなしなど、人のために行動していることが多いと感じました。村の人々は、日本のように家々で各家族と考えるのではなく、村全体が家族のようでした。子どもたちが村中を自由に1人で外に出られるのも、親御さんがついていなくても周りの大人が我が子のように見守っているからだと思いました。村の人々が一緒に子どもの成長を喜べる、そういったつながりが感じられ、少し羨ましい気持ちになりました。

現在のラオスは、かつての日本と似ていると言われています。しかし、今の日本ではラオスのような地域でのつながりや助け合いが失われつつあるように思います。先進国であっても、途上国であっても、互いに助け合える関係でいられることが、とても大切なことなのかなと思います。実際に私

がそのようなつながりを感じた出来事がありました。私が、携帯をなくしてしまった時のことです。ホストファミリーは、面白い話をして、笑いを誘ったり、泣いても良いんだよと優しくしてくれたり、必死になぐさめてくれました。次の日に、携帯が見つかったと伝えると一緒に喜んでくれて、ホストマザーが、ラオスの国旗がデザインされたショルダーバッグをプレゼントしてくれました。もう携帯をなくさないように、出かける時はこのバッグの中に入れ、肌身離さず、日本に持って帰るなさい、と持たせてくれました。その日から、そのバッグは、私にとって、ラオスでの一番の思い出であり、一番の宝物となりました。

このような貴重な体験を活かして、ラオスから学んだことが、将来活かせるように頑張り、何事にも挑戦していきたいです。そして、いつかは、再びラオスを訪れ家族に会いに行こうと思います。



ホストファミリーと一緒に 本人：中央



ラオスの伝統衣装を着て

団員が感じたこと

「本当の幸せとは」

加治木高等学校 2年 二宮 萌音

私はこの夏、鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加し、ラオスのポーン村という人口およそ三百人程度の村に一週間ホームステイをした。

私がこの事業に参加したのは、実際に自分の目で発展途上国を見てみたい、そこに暮らす人々と共に生活し、日本との生活の違いや考え方の違いを実感してみたいと思ったからだ。そして現地で働く青年海外協力隊員の方のお話を直接聞きたかったからである。

私は発展途上国に対し、マイナスのイメージを持っていた。物資がなくて人々が苦しみ、不幸であるというイメージだ。しかし実際にラオスに行ってみると、イメージと全く違い驚いた。ラオスの人々はとても優しくて常に笑顔だった。村では日本にはない人々の繋がりやの深さを感じる場面がたくさんあった。現地で活動していてラオスに在住している青年海外協力隊の方が、ラオスの人たちは助け合いの精神を大切にしていると話してくださった。ホームステイ中にそれを感じる出来事があった。村の子供たちと一緒にいて雨が突然降った時、その度に近くの家に行き雨が止むまで楽しくお話をした。そしてその家の人はお菓子や飲み物を出してくれたりして、快く受け入れていたのである。日本では雨が降っても、誰かの家に勝手に入り止むまでお邪魔するということは考えられないので驚いた。それと同時に、それが普通であるラオスの村の心温かい雰囲気感動した。村全体が家族のようにお互いのことをよく知っていて、信頼し合っていた。

ラオスの子供たちは外遊びが大好きで、毎日汗を流しながら笑顔いっぱい赤土の上を駆け回っていた。そして村の人々はその様子を笑顔で見守っていた。それは一枚の絵のようで、笑顔であふれていて、幸せの象徴にさえ思えた。

初めは、一週間があっという間に過ぎるだろうと思ったのだが、実際はそうではなかった。それはたぶんラオスでの生活がゆったりしていて、一日一日が新しい発見ばかりで充実していたからだと思う。朝は鶏の鳴き声で起こされ、一日村の子供たちと走り回り、ご飯と一緒に食べ、夜暗くなったら寝る、という生活だった。本当に毎日が充実していて幸せだった。そして本当に幸せなのは、日本とラオスのどちらなのかと疑問を抱いた。楽しそうに笑顔いっぱいで走り回っている子供たち

を見ていると、幸せな生活を送るためには物質的に恵まれていることが本当に必要なのだろうかと何度も考えさせられた。

赤土の上を満面の笑みで走り、私の両腕に張り付き「もね、もね」と呼ぶかわいい素直な子供たちを私は一生忘れることがないだろう。水浸しのトイレも、お湯が出ない冷たいシャワーも、あのカオニャオ（糯米）の香りも。五感を使って様々なことを学び感じた一週間だった。大人になったら青年海外協力隊員として働き、大好きなラオスをもう一度訪れてみたい。

Khop chai Laos（ありがとう、ラオス）！



ポーン村の子ども達と一緒に 本人：右



ホストファミリーと別れの時 本人：右

『カオニャオ』の香りによせて」

国分高等学校 2年 峯下 将孝

私は今回海外に行くのが初めてでした。初めての国がラオスだとは夢にも思いませんでした。しかもこんなに早く外国に行けると思っていませんでした。

朝早く鹿児島を出発して、夜遅くにラオスに着きました。ラオスのワットティ国際空港について、そこには日本とラオスの国旗が並んだモニュメントがありました。それを見てとても驚きました。その空港について調べてみて、空港が日本のODAで作られたことを知りました。研修の中で何回も似たようなモニュメントを見て、ラオスの人々の感謝の気持ちを感じられました。その一方で、支援されていることに慣れてしまっているラオスの現状を聞き、少し複雑な気持ちになりました。

ホームステイ先であるポーン村の人々は、私たちを温かく迎えてくれました。ホストファミリーのところに近所の人がよく来たりすることがあって、村の温かさが感じられました。

ラオスの人々はあまり英語は使わないと聞いていましたが、ポーン村の人々が意外と英語を話していて驚きました。村の子どもたちの中には、夜間学校で英語を習っている人も多いと聞いて、英語をあまり話せない私ももっと頑張りたいと思いました。女性は英語を話せない人が多かったので、そこに教育の格差を感じました。

ホームステイのはじめからほぼ毎食、『カオニャオ』というもち米が食卓に並びました。『カオニャオ』はどこか懐かしく、自分を安心させてくれて、とても好きになりました。

ホームステイ3日目、全ての日程が終了してから全員でポーン村近くの沼に連れて行ってもらいました。私が沼に向かう途中、まだ青々とした稲が広がる田園風景の中でも『カオニャオ』の香りがしました。ラオスの温かさやゆったりとした雰囲気を感じさせる『カオニャオ』の香りに私は感動しました。

現地研修では、JICAの青年海外協力隊のお話を

聞くことが出来ました。その中で印象的だったのが、PCインストラクターの人の話でした。PCインストラクターの活動には、PCスキル向上、情報管理技術だけでなく、不発弾の情報管理も含まれていました。50年ほど前に落とされた爆弾が、今でもラオスの人々を苦しめていました。爆弾を落とす側からすれば、一瞬のことかもしれませんが、落とされた側は、何十年も悪い影響が残るとわかりました。

青年海外協力隊の話を聞いて、文化、歴史、価値観の違う外国人に、自分たちが大切だと思っていることを伝えるのは難しいとわかりました。だからこそ、それを乗り越える活動をしている青年海外協力隊の人たちはすごいと思いました。

今回、事前学習や準備期間中にラオスについて調べて、ラオスを知ったつもりでいましたが、それは知識だけであり、実際に現地を見て、聞いた経験とはまた違うものでした。体験することの大切さを学んだ研修でした。



ホストファミリーとの日本食 本人：右



ポーン村の田園風景

団員が感じたこと

「ラオスでの研修で得たもの」

神村学園中部 3年 得永 美潤

私は、この事業に参加して、自分が知らなかった世界を見て体験して、以前と比べると視野が広がり、ものの見方や考え方などが大きく変わったと思う。

今年の5月。学校でこの事業の参加者応募の紙が配られたとき、私は正直行きたくないと思った。「まず、飛行機に乗りたくないし、そもそもラオスってどこだろう。それに、言葉はどうするのだろうか。そんなよく分からない所で1週間も生きていけない。」これが私の最初の考え方だ。以前の私は何事にも怖がり、物事を良くない方向に考えがちだった。そんな自分が嫌だった。嫌だと思っても行動できない自分を本気で変えたいと思った。だから、私は勇気を出して申し込んだ。

この事業へ参加させていただけることが決まってから、出発の日まで、授業以外の時間はほぼずっとと言っていいほどラオスのことを考えていた。頭の中は、期待と不安の両方でいっぱいだった。

そして、7月23日、いよいよラオスに向けて出発した。心配だったホームステイでは、初めはどぎまぎしてしまっていたが、英語や会話帳を活用して、うまくコミュニケーションがとれた。ホストファミリーだけではなく、近所の人とも仲良くなることができて、会話、食事、家事の手伝いなど、すべてが楽しかった。

しかし、2日目、3日目の青年海外協力隊活動視察をして、私の考えは大きく変わった。特に、病院の見学ではいろいろなことを考えさせられた。建物、器具、清潔さなど想像はしていたが、その日本の医療との大きな差を実際に目にしたとき、私は愕然とした。驚きが隠せず、何も言えなくなった。協力隊の方のお話を聞いて、見学では分からなかった医者の方の技術や対応についても知ることができた。患者さんへの対応の冷たさにはすごく驚き、悲しくなった。なんとかして変えるべきだと思った。

視察をして、ラオスでの1週間が楽しいものだけではなく、人の温かさに触れ、理想の国だとすら思ったラオスのいろいろな面を知り、複雑な気持ちでホームステイ先に帰ると、待っていたのはホストファミリーの温かい笑顔だった。

怖がりだった私は、ラオスでの経験をして、もっといろいろな世界を見て、体験して、もっとたくさんのことを学びたいと考えるようになった。何かに挑戦することは、すごく勇気がいることだ。しかし、それを乗り越えて得られるものは、すごく大きいということを知った。私にたくさんのことを教え、自分を変えるチャンスをくれたラオス、お世話になったポン村の方々にすごく感謝している。この貴重な経験をこれからの人生に活かしていきたい。もっと勉強して、将来、医者になって、ラオスのような開発途上国や世界中の困っている人のために何かができるような人になる。



ホストファミリーと一緒に 本人：後列左



お別れ会の様子

「ラオスでの一週間を終えて」

神村学園高等部 2年 藤崎 蘭

私がこの事業に参加した理由は大きく2つあります。1つは、発展途上国の現状を現地に足を運ぶことで、実際にこの目で確かめたいと思ったからです。「先進国」と「発展途上国」に区分される分岐点が何であるのかをきちんと知りたかったのです。

もう1つは、青年海外協力隊として現地で活動している方に実際に会って話をしてみたかったからです。自分も将来その一員になりたいという気持ちもあったので、思い切って応募しました。そして、団員として、実際に一週間ラオスに行ってみて、様々なことを感じ、学ぶことができました。その中でも特に印象深く残っているのは、2日間にわたる青年海外協力隊の活動視察です。

助産師として、ビエンチャンにある病院に務めている宮林さんはとても明るい人で、たくさんの質問に答えてくれました。私は両親が病院勤めということもあり、「ラオスの病院にも実際に行ってみよう」と思っていたので今回病院内の見学もできてとても嬉しかったです。ラオスの病院はこちらでいう診療所に近く、救急車は緑と白でした。私は、宮林さんに「ラオスにきて、実際に出産に立ち会ったとき驚いたことはどんなことでしたか。」と聞きました。2日目にJICAラオス事務所へ訪問した際、そこで見た紹介ビデオで、ラオスでお産に立ち会って衝撃だった…ということを知り、気になっていたので。宮林さんが実際に見たのは、看護師さんが妊婦さんに大声で怒鳴ったり、足を叩いたり、日本では考えられないものだったと聞きました。また、出産が終わると、父親やその家族が子供を抱く暇もなく後片付けをし、妊婦さんもその日のうちに帰るそうです。診察室やエコー室なども見て回りましたが、日本にあるような機材はほとんどなく、少しの道具が置いてある棚やポスターしかありませんでした。しかし、ラオスの病院に勤めていて、日本が見習うべき点もあったといいます。確かにラオスの病院に、精密機器などはほとんどありませんが、その分高等看護師さんは触診で、胎児の状態がわかる人もいますそうです。「日本では機械に頼りすぎている部分もあると思うので、そこは見習わなければいけないのではないかとおっしゃっていました。病院に行く人が少なかったり、医療サービスの改善点や技術不足など、抱えている問題もたくさんある中で、先進国である日本がラオスから学ぶこともたくさんあるんだ、とより深く考えることができ、自分の中で一番勉強になったと思える時間でした。

今回の研修で様々なことを学んで、私たちが今すべきことを3つ考えました。

一つ目は、発展途上国＝貧困、治安が悪い、不衛生などのマイナスイメージだけでとらえないということです。これは、あくまで私たちが勝手に決めつけているだけであり、ただの先入観でしか

ないのです。二つ目は、自分の周りの人にラオスという国についてもっと知ってもらうことです。そもそも、ラオスという国があることすら知らない人も多いため、良いところを私たちが広めていきます。ただし、たばこやゴミのポイ捨てや車、バイクの排気ガスなど環境や街の景観に関する問題はあったので、改善すべき点も含めて知ってもらうことで技術面、経済面において支援する人が増えると思います。三つ目は、「助け合いの精神」です。私たちがホームステイしたポン村では、特に、見ず知らずの人でも家族のように接してくれました。日本でもそれができるような環境にしていきたいです。残念ながら今の現状は、小さな子どもたちに人を信じるより、先に疑うことを教えないといけない時代です。互いに助け合い、他人を思いやることができる社会になるように、これからの将来に少しでも貢献していきたいと思っています。

そして、今一番思うのは、発展途上国だからすべてが先進国に劣っているという考えは間違っている、ということです。宮林さんのお話をきいて強くそう感じました。互いの足りない部分を補い、優れている点を見て学ぶ、それこそが私たちがすべき世界の“助け合い”であると思います。

たくさんのことを学び、感じる事ができたこの一週間は私にとってかけがえのないものとなりました。たくさんの方に支えてもらった感謝を忘れずに、これからの生活に生かしていきたいと思います。



ポン村の子ども達と一緒に 本人：前列右



青年海外協力隊 宮林春佳隊員

団員が感じたこと

「いつかは誰かの縁の下として」

川辺高等学校 2年 鎌田 実里

始まりは「憧れをこの目にしたい」でした。

中学生のとき、青年海外協力隊員の活動についてメディアを通して知りはじめ、彼らに対して憧れが募りました。将来、誰かのためになる仕事に就きたいと考えていた中学生の私は、将来の選択肢の一つとして国際ボランティアを意識し始めました。高校生になってもその気持ちは変わらず、鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加しました。

学校の行事で1回目の事前研修に参加できず、スタートに遅れていると不安を少し持ちながら参加に臨んだ2回目の事前研修。初日は、初めて会う団員、引率者の方々に対して緊張しながらも一緒にラオス語を学んでいく中で、打ちとけていくことができました。ラオス語はシンプルな語に思いましたが、発音や単語を覚えるのは難しかったです。

事前研修も終え、いよいよ来たラオスでの研修。ラオスに着いた夜は、高揚感で胸がいっぱいでした。

私の協力隊のイメージは、主に教育や医療のサポートでした。JICAラオス事務所での講和を前半聞く限りもそうでした。しかし、産業の面でも大きく活躍していることも講和を聞いて知ることができました。一番に驚いたのは「地域の特産品づくり」の支援でした。生産者同士で情報を交換する機会を設けることで、ラオスの織物、竹細工等のより良い品づくりの発見をラオスの生産者が行う。ラオスの人々が主役となるように縁の下の力持ちをする隊員たちの活動に、心から素敵だと思いました。また、隊員の方々が支えたいと思わせるラオスの国、人々に、明るいイメージを抱きました。けれど、その明るいとは反対の暗い過去によるラオスの問題も知りました。それを学ぶことができたのは、協力隊活動視察での隊員お二人の講話からでした。

PCインストラクターとして、パソコン、ネットを利用した情報管理の支援のため、UXO LAOで働いている伊藤隊員。ベトナム戦争で残された不発弾の処理等を行うUXO LAOについての説明と不発

弾の被害をお話してくれました。地雷と聞くとカンボジアを連想していた私は、その事実にとっても驚きました。

そして、助産師として配属されて日の浅い宮林隊員が、医療環境と地方の貧困の厳しさをお話してくれました。

お二人をはじめ、ラオスの人々のために縁の下の力持ちになって活動している隊員方をすごいと思うと同時に、どうしてラオスが途上国とよばれる結果になったのかを深く考えさせられます。ホームステイ先のご夫婦は笑顔でお孫さんのことを話してくれました。もしかしたら、その笑顔は戦争によって見られなかったかもしれないと思うとぞっとします。戦争によって発展が遅れさせられた国の人々は、戦争などの困難にも負けず、彼らの文化を大切に、少しでもより良い成果を得ようと頑張っています。私は、それを支える縁の下に憧れ続けています。



ホストマザーとラオスの竹細工 本人：右



ラオスの救急車

「ラオスを訪れて」

川辺高等学校 3年 天神 果恋

私は今回のラオス研修が初めての海外だったこともあり、発展途上国と言われるラオスを訪れることに少し不安を感じていました。しかし帰国後の私は、満足感と幸福感に満ちていて、ラオスに行ってきたと強く感じています。そして、とても印象的だったことが二つあります。

一つ目は、スマートフォンを持っている人がとても多かったことです。発展途上国と聞くと、物がなく、貧しい暮らしをしている印象でしたが、首都ビエンチャンではもちろん、訪問した小学校でもたくさんの人がスマートフォンを持っていました。さらに私のホームステイ先では、洗濯機や電気ポットまであり、生活に家電が浸透していることに素直に驚きました。

二つ目に印象的だったことは、ラオスの人々は本当に心が温かいということです。言葉が全く分からず、とても苦労していた私に、ラオスの人々は私の持っていた会話帳を示しながらゆっくりと話したり、英語を話せる友人と電話をつないでなんとか伝えようとしてくれました。他にも、近所の方が毎日遊びにきて、散歩につれ出してくれました。バーシーと呼ばれるお別れの儀式では、村長さんをはじめ多くの方が、日本に無事に帰国できるようにと願いを込め、腕にひもをつけてくださいました。そんな心からのおもてなしや助け合いの心が、私の全力コミュニケーションにつながったのだと思い、また、日本に欠けていることかもしれないと考えました。

こういったラオスでの約1週間の経験は、私の考え方を大きく変えてくれました。想像以上に豊かな生活をしていたとはいえ、衛生面やインフラ

の面で、まだまだ先進国の助けが必要だと改めて感じました。しかし、私たちの一方的な物資や金銭の支援では意味がないのだと気付かされました。それは現地の人が本当に必要なのかどうかを考えておらず、ラオスの自立につながらないからです。また、そういった単純な形の支援は、助けてあげる、かわいそうなどといった上から目線の考えが含まれていると思います。それでは先進国の自己満足にすぎません。だからこそ、「何が、どうして、誰のために」必要なのかを考えた、本当の支援が必要なのだと今の私は思います。誰もがそれに気付けるわけではないからこそ、私はこれから伝える立場として、まずは身近な友人や家族に経験を発信し、将来は先進国と発展途上国の架け橋となれるように、私たちのあり方について、考え続けていきたいです。



ラオスの伝統衣装「シン」を着て 本人:右から2番目



お別れ会「バーシー」の様子

団員が感じたこと

「私が見たこと・感じたこと」

神村学園中部 3年 坂口 未結

JICAラオス事務所を訪問した際、ラオスは『スワイカン』という助け合いの精神が強く、貧しい国ではあるが、物乞いや捨て子が少ないという話を聞き、お互い助け合って生活していることを知りました。

私は4日間のホームステイの中で、ラオスの方の優しさを身をもって感じる事ができました。

ホームステイ初日、言葉の壁から家族とコミュニケーションがとれず、悩んでいました。その間、村の大人も子どもも、私に声をかけてくれたり、果物を分けてくれたりなど、いろんな方法で私を元気づけてくれました。村の方の協力を得て、家族とのコミュニケーションに再チャレンジし、目を合わせて笑ったり、食事の時においしいねと声をかけ合ったりして、家族のように過ごすことができるようになりました。

ホームステイ最終日には、ホストファザーも私を4人目の娘のようだと言ってくれたことがとても嬉しく、ラオスの方の優しさを感じる事ができました。

村全体は仲が良く、一つの家族のようでした。これも『スワイカン』の表れで、物が少なくても人の心が豊かでした。人の心を満たせるのは物だけではなく、人の優しさが大切なのだと思いました。そして、幸せというのは物の発展や充実ではないということも分かりました。

青年海外協力隊の方の活動視察では、同じ日本人が言葉や文化が違う国で頑張っている姿を見ることができました。

不発弾処理を行うPCインストラクターの伊藤さんは、文化の違いからネットの環境改善を行う際に、気持ちのすれ違いが occurred。伊藤さんの考えを理解してもらうまでには時間がかかったそうですが、今では伊藤さんの考えも理解され、ネットの環境改善にもつながり、感謝してもらっているそうです。

助産師の宮林さんの仕事も視察させていただきました。ラオスでは経済的な問題などで、出産時に適切な処置を受けることができず、母子ともに死亡率がとても高くなっている問題や、スタッフ

の妊産婦への対応の問題を抱えています。そのため宮林さんは、ラオスの文化をまげたり変えたりしないように心掛けつつ、スタッフの教育やスタッフや母子にとってよりよい環境づくりなどに力を注いでいるとのことでした。その中で、言葉や文化の壁にぶつかることもあるけれど、改善できた時にスタッフや妊産婦やその家族が喜んでくれることに、やりがいを感じたそうです。

この活動視察で、私も将来人の役に立つ仕事に就きたいという気持ちがより一層強くなりました。また、何事もあきらめずに前向きに頑張り、これからも色々な事に積極的に挑戦していきたいと思いました。

この事業に参加することで、ラオスの『スワイカン』と日本の技術や青年海外協力隊の方たちの思いを知ることができました。私をこのような貴重な体験に参加させてくださったすべての方々、同行してくださったスタッフやメンバー、ラオスで出会えた人々に心から感謝しています。



ホストファミリーと一緒に 本人：中央



ポーン村の子ども達

「不発弾の残るラオス」

川内高等学校 2年 井ノ原 和

私たちは活動の中で、現在ラオスで青年海外協力隊として活動されている方々のお話を聞くことが出来た。その中の1人、PCインストラクターの伊藤珠希隊員は、UXO LAOという組織の中で不発弾処理に関する活動をされている。不発弾が残っている地域のデータをパソコンで管理し、その管理方法を周りのラオス人職員に教えているのだ。ラオス人のPC操作スキルの向上を活動の主旨としている。

私は、伊藤隊員のお話を聞いて初めてラオスに不発弾が残っていることを知った。ラオスの不発弾は国自体には関係のないベトナム戦争の名残なのである。約9年間の戦争中に、爆弾はなんと580344回落とされ、約200万~300万トンの量になった。当時のラオスの人口からすると1人当たり約1トンの爆弾が落とされたことがわかる。国土は30~40%（北海道ほどの範囲の地域）が被害を受けた。戦争が終わり、現在爆弾が落とされることはなくなったが、不発弾による事故がたくさん起こっている。誤って触れてしまったり、子供が爆弾だとは知らずに遊んでしまったりするのだ。不発弾が残っている地域と貧困率の高い地域は一致していて、お金になる金属を集める人が被害にあうこともあるそうだ。被害の後遺症で苦しむ人も少なくない。

何十年も前の武器によって、命を落とす人や被害を受ける人がいることに衝撃を受けた。そして、この事実を知らなかったことが残念に思えた。現在ラオスにある不発弾を全て取り除くには、200年という時間が必要だといわれている。戦争が終わっても戦争の爪痕による攻撃が終わらないことには、現地の人々が安心して暮らせる国にはならない。不発弾の恐怖におびえながらも、そこで生活しなければならない人がたくさんいるのだ。戦争の本当の怖さがわかった気がした。伊藤隊員のおっしゃっていた「不発弾を爆発処理すると、爆弾を落とした側の気持ちがわかる」という言葉がとて

も印象に残った。

私は、200年という膨大な時間を縮めるためには、ラオスの現状を多くの人に知ってもらうことが必要だと考えている。支援が広がり、不発弾を早く処理することが出来れば事故の被害も減るはずだ。今の自分の力でできる精いっぱいのこととして、ラオスのことを周囲の人に知ってもらえるような活動をしてみたい。



ラオスの不発弾



ホストファミリーと一緒に 本人：右



お別れ会にて 本人：左

団員が感じたこと

「コミュニケーションの大切さ」

楠井中学校 3年 向吉 瞭

私がラオスで生活してみて一番驚いたことは、英語が全く通じなかったということです。「英語は世界共通語である。」だから、私はラオスに行っても言葉が通じなくても、英語で話せば大丈夫だろうと考え、ラオスに旅立ちました。ホストファミリーの家に着き、日本とは違うトイレや食事に最初は驚きも感じましたが、すぐにラオスの生活に慣れることができました。しかし、一番慣れるのに時間がかかったのは、ホストファミリーとのコミュニケーションでした。私がラオス語を話せず、ホストファミリーで英語が分かる人がいなかったからです。だから、初日はどうすれば良いのか分からず、部屋にこもってしまいました。初日で言葉の壁にぶつかり、自分の気持ちが伝えられないことの悔しさやもどかしさを知りました。この悔しさから「英語に逃げずに、できるだけラオス語で伝えよう」と決心しました。

二日目からは、指差し会話帳やボディランゲージを使って、積極的にコミュニケーションをとりました。最初は伝えられることが少なかったのですが、簡単な会話から始めました。伝えるのが難しい内容でも私が頑張って伝えようとする、村の人たちも真剣に話を聞いてくれ、伝わらなくても「大丈夫」と言って、笑ってなぐさめてくれました。他にも、夜に近所の子どもたちが私にラオス語を教えに来てくれるなど、楽しみながら勉強をすることができました。こうやってたくさんのコミュニケーションがとれたので、より細かく感情を伝えられるようになり、ホストファミリーや村の人と仲を深めることができました。

今回、この研修にあたって、私は現地の人との交流のために、剣玉を持って行き披露しました。技をやってみせると拍手が起こったり、一緒に遊んでみたりと、ラオスの人はとても良い反応をみせてくれました。ラオスに行くまでは、外国の人たちと接するには英語が必要不可欠だと思っていました。しかし、剣玉を一緒にやってみて、言葉が通じなくても伝えようという気持ちや心を通じ

合わせたいという意志があれば、心は通じ合うということを学びました。

日本人はシャイで、あまり外国の人とコミュニケーションをとれない人が多いのかもしれませんが、話しかけてみるととても優しく接してくれたので、ほんの少しの勇気を出して話しかけてみるのが大切なのではないかと感じました。私自身も、この研修で感じたことを忘れず、これからの英語の勉強や生活に活かしていきたいです。

最後に、この事業を支えてくれた同行者の方やラオスの皆様、そして団員の皆さん、ありがとうございました。



セパタクローで遊ぶ 本人：右



ポーン村の田園風景にて

「鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書」

青年海外協力隊鹿児島県OB会

会長 古田 宣稔

第26回鹿児島県青少年国際協力体験事業の団長として一言御挨拶申し上げます。16名の中高生をラオス人民民主共和国に派遣し異文化を体験する事業を無事に実施できましたことは、ひとえに共催市・協賛企業の皆様の御支援・御協力によるものと感謝申し上げますと共に同行していただいた報道関係者、同行者の所属先の皆様の御理解が有ったのことに御礼申し上げます。そして、自らの意思で応募した若く好奇心旺盛な団員、その思いを理解し応援された保護者の皆様に敬意を表します。そして今回のホームステイを怪我なく、事故なく安全にできましたことは、ひとえに温かく迎えてくださったラオスの人々、団員を迎え入れるために準備をしていただいたポーン村の村民の皆様並びに鹿児島で計画立案し、事前準備を完璧にいただいた多くの日本側スタッフのお陰と、深謝申し上げます。また、団員並びに関係者の熱意で、ポーン村での体験事業への思いの詰まった報告書が出来ました事、重ねて御礼申し上げます。

初めての顔合せから、気持ちは保護者の皆様と同じで8日間のラオス研修は大丈夫だろうか、と、団員一人一人を観察しながらラオス語の勉強、披露する出し物の練習に全員で取組む姿に「一緒に頑張っていこう。」と思った次第です。

7月23日1時間遅れて21時30分着、華やかなタイ側の街からメコン川を越え眼下に薄暗い明かりが広がるラオスに入りました。朝6時に集合してから15時間、団員も疲れ切った表情でした。

翌朝、JICAラオス事務所を訪問し、午後からポーン村に入村しました。これからホームステイ先に分かれる団員には一様に不安の色がありました。夕食を終えて団員の宿泊先を一軒一軒訪問しました。初日なので団員の緊張もまだ解けずに言葉の壁、食事、トイレ、水浴びと慣れないことばかりで、別れ際目で追いかけてきました。「もう無理」と思った団員もいたと思います。けれど、団員の順応力やパワフルさは素晴らしく翌朝早くには村の子供達と散歩をし、夜9時まで楽しそうに集まって覚えてたのラオス語や身振り、手振りでお互いの気持ちを伝え合い理解しようとしている姿に「国際交流をやってるな。」と感じました。

団員が溶け込めたのも、ポーン村350人の村民全員が受入れの為に集会を開き、同じ年代の子供のいる家庭をホームステイ先を選び、あまり辛い食事を出してくれ村の周りを自衛し、団員が安全に暮らせる環境を作ってくれたお陰であり、ホームステイ最終日の団員の流した涙に「まだ一緒にいたい。」ラオスの家族にも同じ別れを惜しむ姿がありました。

また、伝統衣裳のシンが良く似合い、現地にどっぷり漬かって活動する青年海外協力隊員のPCインストラクターの伊藤さん、助産婦の宮林さんのお二方には団員からも数多くの質問が出て時間が足りなく、お忙しい中食事会にも出席していただき団員との懇談会を盛り上げていただきました。

最後になりましたが16名の団員、そして同行者の皆様と共に過ごした8日間は忘れ難き記憶に残る旅になりました。暑い夏、ポーン村に広がっていた水田の波に、トラクターの荷台で受けた清風にラオスの人々の温かな微笑みを思い出します。コプチャイライライ、ポーカンマイ！関わった全ての方に感謝申し上げます。



学校交流でけん玉を披露 本人：右



お別れ会での様子 本人：中央



ポーン村の村長と 本人：左

同行者が感じたこと

「ラオスが教えてくれたこと」

青年海外協力隊ルワンダOG 吉原 久美代

出発の日の集合は早朝。にも関わらず遠方からの見送りがあり、事前研修からも感じたが、親御さんの理解協力なしでは成し得ない事業だと頭が下がる。

正直、初日からハードな日々。持参した折り紙・あやとり・トランプ手品の出番はない程充実しすぎていたので最終日の安堵感と疲労感是否めなかったが、解団式での団員の純粹で核心をついた感想に心動かされ、不覚にも涙し疲れは吹き飛んだ。あ一言う事なし！成功！と感じ気づき得たものは計り知れないと。さあ共に世界にひっ飛ばそう！

ポーン村で過ごす。ここに孤独は存在しないのではと思った。大家族が多く、子供達も色々な家に入出入りする。不審者が来れば嫌でも気づく程村人同士の関わりが深いとわかる。家族では勿論、村・地域全体で子育てができています。子供を託し笑顔で働きに出る女性もみた。女性の子育ての不安は少ないとみる。もとより女性には大勢で子育てするDNAが組込まれているという。ラオスの助け合う理想的な大家族をみていると、なぜ日本はこれほど核家族化が進んだか、嫁姑問題で有名な某ドラマの影響も強いのかと独り考えたりした。

こぼれ話も。村を離れる別れを惜しむクライマックスの記念撮影の頃、トイレに閉じ込められるという洗礼を受けた。出ようとすると施錠してないがドアが開かない。相当蹴ったがダメ。相当叫ぶ。電話も繋がらない。”私帰れる？”と思い乍ら壁の1cmない縁に足をかけ、壁の最上に手をかけ、け死ん限り気張ってよじ登った。高いが飛べるかも、でも骨折したら大変だ。道行く自転車青年に「助けて！人呼んで」と指差し叫ぶが走りさる。「助けて」のラオス語を覚えていれば！飛ぶしかない！と覚悟した時、人の声！地獄に仏。壁の上の狭間で佇むしかなく見下ろし叫ぶ私をみて村人が笑いだす。帰れる…なんとドアは外からは簡単に開いた。汚れるも怪我なく、単独行動の危険さを身をもって示した一件…

今回、戦後補償の意味もある日本の援助ででき

た「ナムグムダム」と、偶然日本の援助で造られた学校に訪問できたのは有意義だった。この援助は成功か？と歓迎されていない援助もあると聞く中、ナムグムダムはタイに売電でき、観光地にもなり成功だったと聞くと援助した側も嬉しいし報われる。援助して造った建造物や人材育成、今回話を聞いた地雷の様な「負の遺産」にしても自国の税金がどう使われたのか知る事は意味がある。そうする事で払った税金が本当に必要な援助に使われたのか、戦争の兵器である地雷も元は税金なら、納税したその国民は戦争の加害者ではと考えるといけない。

「無知は罪だ」と言い切る偉人の言葉に出会った事がある。世界には教育を受けられない人もいる中そうだろうか？と疑問だったが、今回のラオスでの体験で納得できる部分もでてきた。何ができるか考え動いていきたい。

最後に、26年続くこの偉業に携わって頂いたすべての方、同志に心から感謝し参加できた事を誇りに思います。



ホームステイの家族と一緒に 本人：右



日本の援助で造られたナムグムダム

「忘れられない経験」

青年海外協力隊ベトナムOG 門野 真琴

12年ぶりに訪れたラオス人民民主共和国の首都ビエンチャン、その時の流れを表すかのように街は大きく様変わりしていた。かつて首都であっても舗装されていない道路があり、車もクラシックカーのように古い車が少し走っていただけであった街中は、新しい自動車で溢れていた。

私は2004年から2006年まで、ラオスの隣国であるベトナム社会主義共和国に青年海外協力隊員として赴任していた。帰国してからは、結婚、出産、子育て...と気づけば、国際協力から遠いところで生活していた。そんな中で、同行の話を聞いたとき、単純に「久しぶりにインドシナ半島に行ける!」と興奮してしまったのだった。その後、同行者としての責任の重さを思い知るのであるが、それでも、行けるタイミングはいつでもあるわけではない。団員たちの経験と同じように、自分にとってもかけがえのない経験になるだろうと考えていた。子どもの成長と家族、職場等の協力もあって、この事業に参加できることになった。

ラオスとベトナムは隣の国にも関わらず、言語が全く異なる。事前研修でラオス語の勉強をしているときに、今回の行き先がベトナムだったら良かったのにと何度も思った。そのくらい英語やベトナム語で簡単に言えることも、初めて学ぶラオス語では難しく、ホームステイでは、思ったことをなかなか伝えられず歯痒い思いをしたのだった。だが、言葉では不便さを感じながらも、村を後にする時、行く前に思っていたのとは正反対に、派遣先がラオスで本当に良かったと心から感じることとなった。それは、やはり今回滞在したポーン村の人たちによるものが非常に大きかったと思う。

ホームステイ中は毎夜、団員たちのホームステイ先を回って問題がないか確認した。村の中を歩いていると、所々で（ホストファミリー宅以外でも）団員たちの顔を見かけた。知らない村で、知っている人たちが楽しそうに過ごしている様子を見ると、なんだか不思議な感じがした。団員には、躊躇したり驚くことも多くあったと思うが、この年齢で

柔軟に対応し、笑顔を見せている様子に感心した。

JICAラオス事務所での国の概要・JICA事業等についての説明、二人の青年海外協力隊員の活動視察では、現場の生の声を聞いて多くのことを感じたに違いない。団員の皆さんにはこの体験で、得られた刺激をどんな時にでも思い出して、これから広い世界に羽ばたいていって欲しい。

同行者ということで、とにかく、みんなが健康で、安全に問題なく一日を過ごせるように気を張りつめていた一週間だった。皆無事に帰国できたことは嬉しく、参加者全員に感謝したい。

最後に、この事業に参加する機会を頂いたことに感謝するとともに、この事業を支えて下さっている協賛企業の皆様、並びに関係者の皆様にお礼申し上げたい。心温まるおもてなしをして下さったポーン村の人々、それぞれが努力し結果につなげた団員の皆さん、お世話になりっぱなしだった同行者の皆さん、事業成功の土台を築いて下さった事務局の皆さん、ラオスでお世話になった皆さん、本当にありがとうございました。



ホストファミリーと一緒に 本人：中央



籐の若芽を焼くホストファザー

同行者が感じたこと

「団員の大きな成長」

(公財) 鹿児島県国際交流協会
交流推進員 酒井 恵

今年度の青少年国際協力体験事業に同行者として参加することが決まったのは、5月。私が、鹿児島県国際交流協会に勤めはじめて2ヶ月が経とうとしていた頃だった。当初は、中高生16名を海外、ましてや発展途上国へ引率などできるのかと不安でたまらず、その不安は日に日に増すばかりだった。団員からは「酒井さんは、出発当日、とても不安そうな顔をしていました。」と後に言われたので、彼らの目にもそのように映っていたようだ。しかし、不安と同時にどこかわくわくしていた自分がいた。なぜなら、私は東南アジアが大好きで、東南アジアの独特の匂いや雰囲気になじぶりに触れることができるのはとても楽しみだったのだ。そして、ワクワクのもうひとつの理由は、私自身、中学生の時に発展途上国でホームステイをするという、団員たちと重なる経験をしていたことだ。その時の経験は、後の自分の人生に大きな影響をもたらしており、同じような経験をする団員たちをサポートできるのは、とても嬉しいことであった。彼らが、途上国で何を見て、何を感じ、何を思うのか、とても楽しみだったのだ。

今回の7泊8日の研修を通して、団員達の姿に胸が熱くなる場面がいくつもあった。特に、青年海外協力隊視察と4泊5日のホームステイが印象的だった。

協力隊視察では、隊員の活動内容や苦労話を聞くことで途上国の現場を目の当たりにし、日本で当たり前のように享受しているものは、決して当たり前でないということ、自分たちがいかに恵まれているかということを感じ、日本とは全く異なる環境に衝撃を受けていた。しかし、一方で、彼らは自分の将来に向けてさらにモチベーションを上げているようにも感じられ、その前向きな気持ちは、忘れていた中学生当時の自分を思い出し、私自身も気持ちを新たにすることができた。

また、ホームステイでは言葉や習慣の壁に戸惑った団員ももちろんいた。しかし、彼らがラオス語や英語を使いながら、がむしゃらに話そうとした結果、ホストファミリーや村の人々と打ち解け、時間を忘れて夜遅くまで遊ぶまでになっていた。最初はうまくコミュニケーションがとれず弱音を吐いていた団員も、その後、満面の笑みを浮かべて「ホストファミリーと会話ができた!」とわざわざ報告にきた姿は、今も目に焼き付いている。

また、ポーン村の人々も団員たちのことを理解しようと努めてくれ、その気持ちがとても嬉しかった。最終日の朝には、団員もホストファミリーも大粒の涙を流しながら、別れを惜しんでいた。互いに理解しよう、わかり合おうという気持ちが、充実したホームステイにさせたに違いない。そんな姿を見て、私の胸も熱くなった。同行者としてこの場に立ち会うことができ良かったと心の底から思った瞬間だった。

団員たちは、この研修を通して本当の意味での異文化理解、すなわち、一方的に自分の価値観を押し付けず、相手を理解することを学んだのではないだろうか。また、困難に立ち向かう姿勢も身につけたように思う。彼らには、今後もそれらの姿勢を持ち続け、あらゆる場面で活躍してほしい。成長した彼らの未来が楽しみでならない。

最後に、今回の体験事業が無事に実施できたことについて共催市・協賛企業の皆様、報道関係者の皆様、同行者の皆様、そして、なにより、当事業の趣旨を御理解いただき、団員を送り出していただいた保護者の皆様に心より感謝申し上げます。



ホストファミリーと一緒に 本人：左



ラオスの食卓の様子

「コプチャイ(ありがとう)ラオス！」

南日本新聞編集局報道部 記者 藤崎 優祐

「ウォシュレットもエアコンもない環境で自分は生きていけるのか」一。

情けない話だが、ラオスに到着するまでずっと不安を抱えていた。

滞在1週間のうち3泊4日は、事業に参加した中高生と同様にマスコミ陣もホームステイ。言葉も、文化も異なる。英語すら通じない世界。頼りは指さし会話帳とジェスチャーだけだ。風呂とトイレの水はドラム缶から手おけでくみ出して使わなければならない。海外出張に行けるというだけで、詳細も聞かずに仕事を受けたことを密かに悔やんだ。

不安はすぐに消えた。道で出会う人が次々に「サバイティ（こんにちは）」と笑顔であいさつしてくれるのだ。肩から提げたカメラを見つけるや、村の神聖な池を車で案内してくれる男性もいた。風呂やトイレ問題も、慣れてしまえば意外と大丈夫だった。と同時に、日本での暮らし全般を自分がいかに当たり前のものと考えていたのか痛感させられた。

生徒たちも初めの方こそ緊張した様子だったが、異文化の壁にぶつかりながらも驚くべきスピードでボーン村の住民と仲良くなり、それぞれが日本での生活を見つめ、現地で活躍する青年海外協力隊との出会いを通し、海外に出て働く意義を考えさせられていたようだった。

経済指標では最貧国に位置付けられるラオス。しかし、笑顔があふれ、助け合いの精神が息づく国では、貧しさを感じることはほとんどない。特に印象的だったのが、朝食の様子。自分と同じ30歳夫婦のホストファミリーが、子どもにテレビ番組を見せながら口元に食事を運び、開けっ放しの玄関から入ってきた近所の子どもにも一緒に食事をさせる。ラオスでは当たり前のことなのだろうが、思わずカメラに収めた。どこかうらやましくさえ思え、独身の自分も家族を持ちたいという思いが自然と芽生えた。

ラオスは近年、急成長を遂げている。水道や家電もまだ完全には普及していないのに、市街地だけでなく村でも多くの人がスマホを手に入れているのは驚きだった。10年ほど前に同じ事業でラオスを訪れた同僚によると、車を持っている人が村に数人しかいないような状況だったという。赤土と青い空、一面に広がる美しい水田に囲まれて暮らすラオスの人々の心がいつまでも変わらないで

いてほしいと願う。

村を離れる前日にあった「バーシー」という儀式で、村人が熱心に祈りを込めながら代わる代わる自分の腕に白い糸を巻いてくれた。言葉が通じなくとも気持ちが何よりうれしくて、気がつくと涙がほおを伝っていた。「美しい田園風景もだが、何より人間関係の温かさに魅せられた」。こう話したのは現地の日本人通訳。毎年のように旅行するうちに、いつしか移り住んだという。思わず納得し、私もラオスは再訪したい国の一つになった。

帰国すると一転、現実には引き戻された。「核」「ミサイル」といった物騒な言葉が連日ニュースで飛び交う。いい加減、過激な発言はやめて「サバイティ」といかないものか。

今回の事業に参加した生徒たちが国際理解を深め、将来さまざまな場面で活躍してほしい。いつの日か成長した姿を取材する日が来るのを今から楽しみにしている。私自身も生徒たちに負けずに成長できればと思う。最後になりましたが、今回の事業に携わった関係者の方々、貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。



取材中の様子 本人：右



ホストファミリーと一緒に 本人：右

同行者が感じたこと

「心の豊かさ」

鹿児島読売テレビ報道局報道部

記者 末吉 弘孝

ラオスはどうか？色んな人に聞かれたが必ず答えたのが“村人の心の豊かさ”だ。取材に来る私を快く受け入れ、雨が降ればすぐ傘やカップを貸してくれた。家族全員の食事を用意するのやっとの貧しい生活をしている中、取材に行けば飯を食べていけと言ってくれる優しさ。物が無くてもそれをなんとかして乗り越えようとする気持ち、今の日本人に欠けている心の豊かさを感じることが出来たことが私にとって一番の財産になった。

上司から一言「ラオスに行ってきたくれ。」私は楽しい海外出張に行けると何の疑問ももたずに二つ返事で「喜んで。ありがとうございます」と答えたのが出発2か月前。それから徐々に取材内容やラオスを調べるにつれ不安が募ってきた。同行するのは中高生16人、そして私もホームステイ？インターネットで調べると発展途上国だとか風呂が無いとかマイナスなイメージを持ちながらラオスに入った。しかしイメージとは違ったラオスが待っていた。道路は赤土で建物も高床式住居を増築した感じで鍵もついていない家が並んでいる一方、中を覗くと天井にはクーラーが、そして水洗便所も設置され高校生は手にスマートフォンを持っていた。海外から進出してくる企業が多いことが影響している。

発展の進み具合にラオスの人々の心の豊かさが失われないか少し心配になった。経済発展の魅力も感じた一方、恐ろしさも学ぶことが出来た。

「世界の全ての人に平等に幸せがあってほしい」そんな思いで助産師として、PCインストラクターとして活躍する青年海外協力隊2人の視察を通して多くのことを学んだ。現地の人たちと馴染むことからスタートしなければいけない、自分の常識が常識ではない相手と向き合う大変さ、辛さを聞き悩みながらも日々、目的を持ち輝いている姿が印象に残った。

また、生徒の純粋さや対応能力にも驚かされた。あれだけ不安がっていた生徒らがホームステイ2

日目の夜には村人たちとお盆で作った楽器を使って音を奏でどんちゃん騒ぎをしていた。ここだけの話しとつくに就寝時間は過ぎていたと記憶している。（笑）生徒らの積極性やなんとか学ぼうと懸命な姿に私も吸い込まれるように取材に夢中になった。泣いている中カメラを向けてしまった生徒、快く入浴シーンを撮影させてくれた生徒、本当にありがとう。本当に生徒のお陰で良い取材が出来、良い番組が作れたと思う。

私はこの事業を通して1人1人が国際協力を考えることの大切さを感じた。今回の経験をいかし、報道マンとして1人の人間として国際協力とは、国際協力の必要性を少しでも多くの人に伝えていきたいと思う。最後に、これまで26回に渡りこの事業を続けてくださっている実行委員会の方々、また協賛企業の皆さま、このような貴重な体験をさせていただき感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



団員と一緒に 本人：右



ホストファミリーと一緒に 本人：中央

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣 旨

鹿児島県の青少年を発展途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする(実績は別紙参照)

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

6 経 費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者(参加者に対する助成金による方法を含む)及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国(地域)	派遣期間	人数(生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (コタキナバル, サリマンドウ)	平成3年 3/27(水)~4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 阿久根市, 名瀬市, 市来町, 伊集院町, 祁答院町, 内之浦町, 佐多町	公募
第2回	マレーシア (スプランペラ)	平成4年 3/27(金)~4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 鹿屋市, 大口市, 指宿市, 隼人町	公募
第3回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成5年 7/23(金)~7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 加世田市, 三島村, 隼人町, 志布志町, 高山町	公募
第4回	インドネシア (バンドン, パシールカリキ)	平成6年 8/1(月)~8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市, 出水市, 指宿市, 垂水市, 菱刈町, 霧島町	公募
第5回	マレーシア (コタバル)	平成7年 7/30(日)~8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市, 国分市, 頤娃町, 宮之城町, 隼人町, 吾平町, 根占町, 中種子町	公募
第6回	マレーシア (タイピン, パリットムンントリー)	平成9年 7/27(日)~8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 東市来町, 伊集院町, 郡山町, 日吉町, 吹上町, 金峰町	市町村推薦
第7回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成10年 7/26(日)~8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市, 大口市, 国分市, 菱刈町, 始良町, 浦生町, 満辺町, 横川町, 栗野町, 吉松町, 牧園町, 隼人町, 福山町	市町村推薦
第8回	タイ (アユタヤ, ルンカーオ)	平成11年 7/30(金)~8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市, 指宿市, 加世田市, 喜入町, 笠沙町, 知覧町	市町村推薦
第9回	タイ (チェンマイ, メーカンボン)	平成12年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 財部町, 末吉町, 串良町	市町村推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン, フーホイ)	平成13年 7/20(金)~7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市, 出水市, 加世田市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 満辺町	市町村推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン, タンビン)	平成14年 8/4(金)~8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 枕崎市, 国分市, 垂水市, 満辺町	市町村推薦
第12回	タイ (ナコンラチャシマー県を予定していた)	平成15年 SARS及び鳥インフルエンザの影響により中止			市町村推薦
第13回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, トレンガヌ州)	平成16年 7/19(月)~7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市, 枕崎市, 国分市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第14回	ベトナム (ハノイ, ホアビン省, モーハイ村)	平成17年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 枕崎市, 串木野市, 国分市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第15回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, サバ州)	平成18年 7/22(土)~7/29(土) (7泊8日)	18名 (12)	鹿児島市, 枕崎市, 霧島市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第16回	ベトナム (ハノイ, バクザン省, バクニン省)	平成19年 7/22(日)~7/29(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市, 枕崎市, いちき串木野市, 霧島市, 南さつま市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第17回	ラオス (ビエンチャン県ボンミー村)	平成20年 7/20(日)~7/27(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南さつま市, 南九州市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第18回	ラオス (ビエンチャン県ナーソン村)	平成21年 7/19(日)~7/26(日) (7泊8日)	18名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, いちき串木野市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第19回	インドネシア (南スラウエシ州, ビナバサ村)	平成22年 8/1(日)~8/8(日) (7泊8日)	19名 (13)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第20回	マレーシア (クランタン州, クバンテラガ村)	平成23年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, いちき串木野市, 霧島市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第21回	ベトナム (ホーチミン市, テンザン省, ヴンフオイ村)	平成24年 7/22(日)~7/29(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第22回	ベトナム (ダナン市, ホイアン市)	平成25年 7/21(日)~7/28(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市, 鹿屋市, 枕崎市, 霧島市, いちき串木野市, 南さつま市, 南九州市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第23回	カンボジア (プノンペン, バッタンバン)	平成26年 7/20(日)~7/27(日) (7泊8日)	23名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, 枕崎市, 霧島市, 南さつま市, 南九州市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第24回	カンボジア (プノンペン, カンダール州タケオ州)	平成27年 7/19(日)~7/26(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, いちき串木野市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第25回	ラオス (ビエンチャン都, ビエンチャン県)	平成28年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第26回	ラオス (ビエンチャン都, ビエンチャン県)	平成29年 7/23(日)~7/30(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, いちき串木野市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
	計6カ国	計 (331) 平均13人			



裏表紙デザイン: 山本 珠子 (鹿児島高等学校 1年)

【イラストに描かれているもの】
ラオスでのお別れの儀式「バーシー」

【タイトルの「スワイカン」】
ラオス語で「助け合う」という意味

＝ 編集・発行 ＝

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

〒892-0816 鹿児島県鹿児島市山下町14-50

かこしま県民交流センター1階

公益財団法人鹿児島県国際交流協会内

担当: 福永 みゆき, 酒井 恵

TEL: 099-221-6620 FAX: 099-221-6643